

## 私たちの通学路

高梁小学校 六年

内田 真菜  
うちだ まな

私の通学路は、自宅を出発して、坂を上り畠の間を歩いて坂を下って、学校に着くという経路になっている。畠の間の細い道は、車はあまり通らないが、夏になると草が生いしげって、私たちの通学のじやまをする。

六月のある休みの日の朝、母が、「二人とも、通学路の草刈りをするから手伝つて。」

と言つてきた。私は、「ええ」と言つのは何とか我慢したが、虫がいるし、めんどうくさいと思つて返事をすることをためらっていた。姉も返事をしなかつた。きっと私と同じで行きくなかったのだろう。母は、続けて、「あんたちの通学路でしょ。」とゆつくり圧をかけるように言った。私たちはしぶしぶ「はあい」と氣のない返事をして手伝つことにした。

「先に刈つとくから、呼んだら来て。」と母は、草刈り機をかついで畠に向かつた。返事をしたけれど、できれば行きたくないたつた時、ついに呼ばれた。「もう行かなきやいけないのか。」と思ひながら重い足取りで向かつた。畠に着くと母が真っ赤な顔で草を刈つていた。通学路には刈られた草が歩く道をふさぐように倒れていた。それは一メートルほど続いていた。刈られた草を集めないと私たちの仕事だ。私たちには、こんなに長い道のりをやるのかと、全くやる気が出なかつた。しかし、真っ赤な顔の母を見ると手伝う以外の選択肢はなかつた。姉と二人でほうきと熊手を交代しながら草を集めた。暑かつた。帰りたかつた。早く終わりたかった。

二人で手伝つていると調子に乗つてきた。二人で話しながらしていると楽しくなつてきた。通学路はきれいになつていつた。畠の下の家のおじさんが、「お手伝いがんばつとるのお。」

と言つてくださつた。おじさんは登下校の時いつも元気あいさつをしてくれるおじさんだ。その言葉を聞いてますますがんばつた。

先を見ると道に倒れている草はあと少しになつていた。私たちの顔も赤くなつていた。最後の力を振りしぼつて、「何とか全ての倒れていた草を掃除することができた。

「ふう、なんとか終わつた。」

母は変わらず真っ赤な顔だったが、

「おつかれさん。」

と笑顔で言つてくれた。

次の月曜日、通学路を通り気分がよかつた。虫などがでなくなつて通りやすくなつた。今までは、父が一人でやつてくれていたけれど、姉と手伝つてくれいにした。おじさんへのあいさつの声も自然と大きくなつた。

いやいや始めた手伝いだが続けると自然にやる気が出てきた。そして、家族で力を合わせて草刈りをすることと、胸を張つて、『私たちの通学路』と言ふようになった。